兵法孫子

北村佳逸著

立命館出版部

著者の私語

「老子解說」「孟子解說」「孔子解說」「墨子解說」「論語解說」に喝采を與へられた讀書界は、同じ著者の「兵法孫子」も拍手のうちに受取つてくださると期待する。讀まれても讀まれなくともいい、知己を百年に待つといつた痞我慢はいはないどころか、次に出版するであらう新版兵法書も豫め推輓をお願ひして置く。この著者割合に商賣氣がある。

老子と孟子と孫子とは虛無と仁義と功利と三角形の尖端が別々の方向を指示するやうに漢民族の一位三體の理想を代表するから老、孟から順序として孫子に及んだまでゞある。

老子は何を考へていゝかを考へさせる、孟子は何を爲すべきかを教へる、孫子は斯くせよと號令する。指示する。指示する指をみるのではない。指の指さす方角を見るのだ。東洋に生れてこの三大哲學を讀まない人は氣の毒な人である。

白人間にさへ支那古典研究熱は高まつてゐる、孫子の言葉の底を流れる果敢鋭角な男性的闘志は、にやけた人間に勇氣をつけ、勇氣のある人物を更に飛躍させ、一字一句ひし〳〵と胸にこたへて、

科學頭を冷やりとさせる。僕らは白人に比して地理的種族的文字的に研究に便利を持つ、海の遠い彼方にのみ書物があるやうに思つて思想界の浮浪者に終るのは、これも氣の毒な人である。

軟性正義派の主張する「平和は道德」から「戰敗も仁義」となり、それを追跡すれば「亡國も成行き」となりさうだが、この道德はまやかし物である。正義を支柱として眞の力が立つのが道德の常道であるが、力の行くところに道德がついてくる時代には倫理觀念にも少しの修正を加へて、いつくるか、あてにならない道德が常道に復歸する時代を待たねばならぬ。そんな時代があるか、ないか。天に口なし、人が勝手にいふ。二つに一つはあたる事だ。

孫子の註釋は大てい讀破したが、どれも氣に喰はなかつた。人の講義を燒き直したものでないかち思ふまゝに解說して鑄型がない、僕は鍛冶職を學ばなかつた。僕には僕一流の見解がある。

歐文は書架から亂抽して解說を助けた。

柳生流の秘傳が澤庵和尙から出で、孫子の戰爭哲學が老子から出で、靑い瓢箪から勇ましい春駒が出で、退屈から欠伸が出で、切られたら血が出で、兵法は虛から實が出る。

孫子の讀み方と日常生活への應用

軍形篇に「勝兵は先づ勝つて後に戰を求める」（七六頁）とあるが、勝つてから戰爭をするとは何であるか。

戰爭とは勝敗を定める形式であつて、戰爭する前に勝つてゐないやうな戰爭は國運を賭けたばくちである。將軍とばくち打ちとの差はそこにある。

兵法學者は世の中のことは何でも戰爭とみて戰時生活をする、そして日々に勝ちつゞけて行く。こゝに議會を開くとする、株主總會を開くとしても同じことであるが、議案を挾んで政府と議員との論戰が開かれる。

各派交渉會で通過する見透しがついてから政府案が上程される、日程に上る前に政府がすでに勝つてゐるのである。勝つてから後に戰爭が開始されたのであるから議事は勝つた記錄を殘すだけの技術に過ぎぬ。「通過するか」「しないか」議會を開いてみなければわからぬやうな目先のみえぬ內

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

閣では輔弼の責に任ぜられない。

もう一つ、商賣でいはう。賣り出す前から十分に購買慾を煽揚して大衆が買ひたくてならないやうにする。時好に投じるとか、生活に絶對必要とか、何かの特徴をつけるも一方法である。

買ひたくてならぬとは買手がもう參つてゐるのである、そこで商品に相當の値をつけて並べて置けば默つてゐても買つて行く。一方的に決定された賣値段のまゝで買つた方は負けてゐるのであるが、「負けた」と自覺しないで滿足して買つて歸る。負けても負けたと思はせないやうな勝ち方をすれば、負けたものは又た負けにくるから商賣は繁昌する。

負けない買手に賣らうとすれば値切られて賣手の方が負ける、無理に勝つても、買手が負けたと知つたら復讐心が起つて土地を占領しても鎖撫工作に後の惱みが殘る。

僕はこんな風に兵法を講じてゐる、また新聞の論說を書くにも兵法の利用を忘れぬ。

兵法の奧義と禪の悟入とは同一である、兵法を玩味した人はこの世を面白く暮して行けるだけでも一生のとくで、山奧に隱栖しなくとも都市に住んでゐても禪味が味へて、夏でも涼風が吹くのは冷房裝置のわざでない。

わが著「孫子解說」も版を重ねて社會に相當寄與したはずである、今度また兵法孫子を發行する

ことになり、いまこの文を書いてゐるときわが國は大東亜戰爭に連戰連勝して亜細亞の諸民族を糾合して立ち、世界新秩序の建設に著々その功を收めてゐる。吾々は一生の間に何度戰爭を體驗するとも知れないし、また平和生活にも兵法が利用できるのだから、どんな時代でも兵法無用のときはないといふ結論に、どの途から行つても落着いてくる。

孫子 SUN TZU

北村佳逸著

始計第一 SHIH CHI (Preliminary Reckoning) I.

始計とは戰爭の設計である、この構圖によつて戰爭が構成され勝利の基礎となる。

孫子曰、兵者國之大事。死生之地、存亡之道也。不レ可レ不レ察也。

孫子曰ク兵ハ國ノ大事。死生ノ地、存亡ノ道ナリ。察セザルベカラズ。

戰は國家の重大事件である。軍人としては作戰計畫の良否が直ちに死と生との運命を定める分水嶺であり、國家としては興廢の岐路に置かれる。（戰爭は濫費であり大なる破壞である、濫費の後に來る緊縮調整、破壞の次に起るべき再組織の責任まで考慮の中に入れたら、容易に戰端を開かるべきものではない）深く考察してから始めねばならぬ。

勢頭に大炬火を點じて綱領を示す。この筆法は老子に同じ。不用意にこれを受取れば孫子の平凡に驚くであらうが彼れは野蠻人のする感情的喧嘩を說くのではない、極めて組織的な理詰めで推して行くので、彼氏は悠然として筆を進め一字一句一節と次序を追つて戰爭哲理を組み立てゝ行く。この節は戰の定石から始まり徐々にその變化に及ぶ。老子に「常を知るのが明。常法を知らないものは妄動してその結果は必らず惡い。常法を知れば寬容になり、その延長は原則を體得するに到り、死ぬまで危いことがない。」この安全第一主義が篇末まで脈をうつてゐる。わかり切つた安全な道理が實際に於いて行はれ難いのは、わかり切つてゐない證據である、個人にあつて何でもない口論から喧嘩へ、喧嘩から刄傷へと深入りし、時としては復讐の遺產を子孫にまで相續させる。個人の累集である國家でもその通り、群集心理に誤られて思慮深い將軍でも亢奮して全軍を死地に投ずることが多い、だから孫子は開卷第一節において老敎官が靑年將校に訓示するやうな口調で、「不可不察」と內省を促した。

文の構成は――既知の一判斷である「兵者國之大事」と大前提し、（この一句は外延が最も大きいから大概念といひ）、この起手と「不可不察也」の結尾とを關聯させるたる「死生之地」と「存亡之道」との雙關を媒介概念とし、既知の判斷（大事）から、他の既知の判斷（死生、存亡）の助

けによつて「不可不察」といふ未知の新判斷に導く推理であつて三段論法の一種（推測式）である。

「兵」こゝでは戰爭を意味するが漢文では兵の字を多樣に使ふ。（一）軍隊。用例、抗兵相加。（二）軍火（兵器）。用例、棄甲曳兵走。（三）兵丁（兵士）。用例、募兵。（四）軍事。用例、通曉於兵。（五）打伐（戰爭）。用例、開兵端。（六）武力の支配、用例、兵權。（七）軍略（兵法）。用例、謂兵者。（八）戰鬪力（兵力）。用例、兵强却敗。「國」領土、住民、政府の三つが國の構成要素で（そのどれかを缺いたものを擬國家といふ）換言すれば一定の地域内に人類が集合し、その上に統制力を有する政府の存在を要する。この本でいふ國とは周王が封じた王族又は勳勞者が天子の强制力のないのを倖ひとして勝手に弱國を兼併し、身は諸侯であつても國王と僭稱し、その領土を國と名づけてゐる變則的な國家である。「死生之地」この句に用ひられた地の字は極めて微妙な措字で適當な譯字が見當らぬ、なぜ、こんな字を用ひたか、これは次の句の道に對立せしめ文を美しくするための借字で、古文には類例が多い、義から云へば死生之道存亡之道、又は死生存亡之道である。

故、經之以五事、校之以計、而索其情。一曰道、二曰天、三曰地、四曰將、五曰法。

故ニコレヲ經スルニ五事ヲ以テシ、コレヲ校ヘテ以テ計リ、而シテソノ情ヲ索ム。一ニ曰ク道、二ニ曰ク天、三ニ曰ク地、四ニ曰ク將、五ニ曰ク法。

故に之れ（兵）を經（經始、計畫）するに次に述べる五事を基調とし、これを校（比較）計量して彼（敵）我（味方）の實情を考へ索める、五事とは道、天、地、將、法（この五つは次節に詳說がある）。（基本概念から說いて徐々に戰爭行政の各論に入る）。

「經」設計、戰鬪企畫。詩經、大雅、經始靈臺經之營之。「校」去聲でチヤオと訓めば校と較とは同聲同音の動詞となり比較の意となる。シヤオと發音すれば學校、將校の如き名詞となる。在來の訓解は「之を校するに計を以てす」で計を抽象名詞とするが、この書は計を動詞四段活連用形として取扱つた。「索」は上平にスアと發音せしめ動詞二段活終止形として模索、搜、求の意とする。（蕭索、索莫などの形容詞又は副詞には去聲、音スウ）。「情」情僞の情で僞に對立する、實情、眞相。

道者令民與上同意也。故可與之死可與之生而民不畏危。

道トハ民ヲシテ上ト意ヲ同ジクセシムル也。故ニコレト死スベク、コレト生クベク、民危キヲ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長レズ。

（前節を承けて五事を分解叙述する）五事の第一項である道とは何ぞ？　國民をして君主と心を一致せしめる。故に彼らは君のために生死を共にし、國難を濟ふに當つて危險を畏れない。

それが道である。

「道」儒教又は道教のいふ道ではなく、戰爭道德である。忠君、義烈、祖國愛の意氣、犧牲的精神などは戰勝の基礎である、そんな武士道の要素の總和を兵法で道といふ。國家の總力を擧げて戰ふ場合に國民の意思が緊密に政府の方針につながつて動き、國家と存亡榮辱を共にする覺悟が定れば民は死を恐れないが、一時の危きに狼狽して擧措を失ふやうでは終局の勝利は望めない、國民が政府を信賴せざれば擧國一致體制は整はない。

天者、陰陽、寒暑、時制也。

天トハ陰陽寒暑ノ時制ナリ。

五事の第二である天と稱するのは陰陽（吉凶）寒暑（季節）の時を利用して勢を制し作戰に力づけることである。

「陰陽」晴雨と解してもいゝが、易占、方位などで吉凶を定めることで、軍人は割合に御幣をかつぐものである。楠正成が「大將軍星が西に現はれてゐる時に關東勢が上方に押寄せてくるのは実に背くものである」といつて部下を激勵し（楠公記）、平重盛が「土地は平安であり年號は平治であり吾らは平氏で、天は三つの吉兆を示したまふ」と後騎に力づけた（平治物語）、その類例は甚だ多い、鬼門に向つて攻めるなどは士氣を沮喪せしめる。かやうな信仰は古代のみに存しない、ビルヂングの屋上に祠を建て、飛行家が身に護符をつけ、自動車の初乘に神詣でをするなど、東洋ばかりでなく、どの國にも前兆説はある、正信であらうが迷信であらうが強ひてこれに逆はないで良將はその心理を利用する。論語、怪力亂神を語らなかつた孔夫子でも厄祓（やくばらひ）の式には歳越しに鄕人とともに臨席された。「寒暑」司馬法（スマフフ）に冬夏は兵を興さずとあるが、防寒防疫の施設が不十分な時代は極寒酷暑を避けたもので、冬夏の戰は戰死者より病死者の多きを常とする。科學の進んだ現代でもまだ天候を征服するに到らぬ。滿洲建國に、馬賊あがりの烏合の衆を率ゐた馬占山が嚴冬に北滿に出沒してこれを追討する日滿聯合軍は大に惱まされた。彼らは沼澤に密林に栗鼠のやうに逃げ廻つて、氣候中和の地に育つた日本軍は、たとひ飛行機の援助はあつても彼らを掃蕩するは容易でなかつた。雨雪による道路の泥濘と濃霧低雲のための展望の妨害が、迫擊の困難なだけそれだけ逃亡者

には逃亡力を加へた。日本の對外戰は多く寒地で行はれ、氷雪のため露營が困難となり防寒具のため行動の敏活を缺き、水潦が行軍を妨げ、溫食を要するための炊事の煩累があり日が短いから能率が擧りにくいなどの不利益が計算せられる。「時制」四季、風、雨、雲、霧、天體の動き、その他の現象を總括していふ。

獨ソ戰においてソ聯は冬將軍の援助を恃んだ、ナポレオンもロシヤに負けずして零下四十度の冬將軍に負けた、科學の發達をもつて誇るドイツ軍もモスクワを距る五十キロまで迫つたが、寒氣を避けて休戰した。寒暑の氣候は土着人を利するが、侵入者には不便である、墨子兵法は防禦主義であるに反して孫子は攻擊主義であるから氣候に對して敏感でこれを五事の中に加へた。

地者、遠近、險易、廣狹、死生也。

地トハ遠近、險易、廣狹、死生ナリ。

地とは、根據地から戰場までの遠近、戰地の險隘と平坦。戰線の延長の廣狹。陣地に活路ありや。退却もできない袋地なりや。それ等の地理による作戰の研究である。

孫子は道（上下一致）を第一とし、次に天候、次に地理と順序づけたが、孟子は道（人和）、地

利、天時とした。戰爭と地理とは不可離の關係にある、すでに天候を考へたら次に地理に及ぶは順序である（森林草叢を「生」といひ、不毛の地を「死」とする說は後章に詳述する）

將者、智信仁勇嚴也。

將トハ智、信、仁、勇、嚴ナリ

五事の第四項に將と稱するは智、信、仁、勇、嚴の五要素を兼備せねばならぬといふ意味である。古代からの基本道德は仁義禮智信であつたがその中から義と禮とを拔いて勇嚴を代置し、仁智信の順位を智信仁と變へたのは深き考慮の後に決したことゝ思はれる。

將たる人格構成要素の中から何故に義を省いたか著者は惑ふ。泥棒にも親分子分の間に義が確立しなかつたら大盜とはなれないと莊子（ヂュアンツ）はいふ。第一次歐洲大戰にドイツは祖國のために死ねと標語し、アメリカは正義のために參戰せよと叫んだ。義は士氣を振作せしめるに最も效果的であるから嚴を去つても義を忘れてはならぬ。たゞ信の中に義が含蓄されてあると解すれば强ひて爭はないが、義の拔けた戰爭は時代の大墮落である。孟子は〝春秋に義の戰はなかつた〟といつた。

孫子は老莊系なら吳子は孔孟派といへる。老子は義を輕んじ禮を侮つたが、孫子は主將五德の中

から飯の中に砂が交つてゐた時のやうに、禮と義との砂を惜氣もなく棄てゝしまつた。禮は軍律の基礎である、それをオミツトしてどうなる。嚴の中に禮を含蓄してゐるかも知れないが、禮は他家へ食客となるべき寄生物でなく義とともに道德の立派な嫡出である。この二つを特筆大書しなければ用兵の意義が弱い。『吳子』國家を制し軍政を治めるには先づ軍人に敎へるに禮を以てし、これを激勵するに義を以てし、卑怯な行動は武士としての恥辱であることを知らしめる。」凡制國治軍必敎之以禮、勵之以義、使有恥也。」亂暴を膺懲するのが義兵、兵の多數を恃んで弱國を攻めるのが彊兵、腹立ちまぎれに攻め立てるのが剛兵、國際間の禮儀を無視し利益を目的とするのが暴兵、國政は亂脈で國民は貧乏してゐるのもかまはず動員令を下すのが逆兵。」禁暴救亂曰義、恃衆以伐曰彊、因怒興師曰剛、棄禮貪利曰暴、國亂人疲舉事動衆曰逆。孫子は哲理に於いては兵法家の群を拔くが道德觀念は吳子より稀薄である。と、それは著書の上にのみいふことで、吳子は功利に急に、妻を棄てゝ顧みなかつた殘忍な性格者であり、これに反して孫子は功名心に淡く、哲學者の氣品のある景慕すべき人格者であつた。兩者とも二重性格を持つてゐた。

「智」道德的には仁信智勇嚴とすべきであるが孫子は智を第一順位に置いた。智とは戰術的技巧の外に常識をも機智をも含む。戰は勝負事であるが兵卒は碁石のやうに冷たいものでなく血氣を沸

かせて常軌を失ふこともあり、敵の出やうで機に應じて策動せねばならないから大局の決するは一に將の智に待つ。敵の術中に陷つた時は特に冷靜な智の判斷を要する。「信」信賞必罰の信で、賞罰を誤らぬことも信であるが、上は君主の信任を得、下は國民の信賴を失はぬことも將帥の資格條件であらう。『論語』食料の充足、軍備の充實は民衆をして政治家を信用せしめる。「仁」戰に人道の誇がなかつたら匪賊の集團と何の違ひもない。『老子』兩軍が戰場で相會つた時に、常から仁慈の心を養つてゐた方が勝利を得る。『孟子』國君好仁、天下無敵焉、『論語』智者不惑、仁者不憂、勇者不懼。「勇」老子は自制心から起つた勇氣を尙び孔子は勇者不懼といつた、孟子に孟施舍(マンシシヤ)の勇を養ふ工夫を說いて〝要は懼れを超越するもの〟とした。孟施舍の勇は必勝を期しない、孫子は必勝を期する。彼れは敵の力を量らないで進む、これは敵を量つて進退するところは一致しないが共に懼れないことを將の必須條件とする。「嚴」嚴格に命令が徹底する。平生は德を以て懷柔するが事に臨んでは將帥が叱咤怒號するまでもなく死を賭して働く。

法者、曲制、官道、主用也。

法トハ曲制、官道、主用ナリ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com